

記号論入門

82.10.21

於 市ヶ谷ルーテルセンター

橋 爪 大三郎*

はじめに

- 1 記号論 vs 知的生産の技術
- 2 記号論の方法
- 3 構造主義と記号論
- 4 記号論への批判

記号論はまだまとまりのない分野で、いろいろな人が勝手にいろいろなことを言っているのが現状である。通説・定説のようなものが明瞭に出来上がっていないとも言える。従って、記号論の全般について、わかりやすい入門的な案内図を書くのは困難だ。

そこで概説はさて、なせいまわれわれは記号を問題としなければならぬのか、すなわち記号論の存在理由について、私の考えるところをのべることにする。

これだけでもまだなかなか大変なので、次の4つに論点をしぼろう。

【1】 記号論 vs. 知的生産の技術

——記号論と知的生産の技術とは、関心がどうちがうか？

【2】 記号論の方法

——記号論はどのような特徴的な方法をもっているか？

【3】 構造主義と記号論

——記号論と構造主義とは、どのような相互関係にあるか？

【4】 記号論への批判

——記号論はやりのなかで、なにが見落されかけているか？

* はじめに113頁30、社会学専攻。現住所 〒248 鎌倉市材木座5丁目9-11。

1 記号論 vs. 知的生産の技術

記号論は、「知的生産の技術」とだいぶ違った行き方をとっている。記号論とは、知識の技術学ではなく、知識の本質学なのである。

知的生産の技術とは、何かノウ・ハウのようなもので、それを身につけていけると、そうでない場合にくらべてずっと順調に知的生産活動を営むことができる。しかも、そのノウ・ハウそれ自身も知識なので、それだけを切りはなして伝達したり学習したりできる。こういう発想が知識の技術学の特徴であろう。

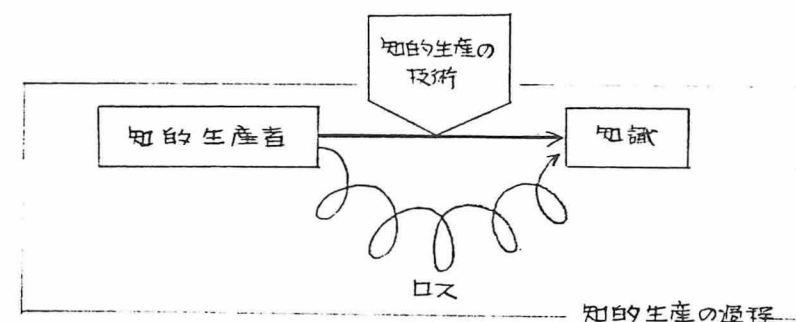


図1

N.B. 知的生産の技術は、知的生産の過程でロスやミスもなくし、生産の効率をあげるものだと考えられる。だがもしかすると、それだけでなく、生産される知識の質も向上させるのかもしれない。その場合には知的生産の技術は、知的生産の過程にもっと積極的に介入し、それを別のものに変えていることになる。こうなるとたんなる「技術学」という言い方は、不適當だろう。しかし話をややこしくしないために、記号論の対極に、知識の技術学というものが考えられるとして話をすすめる。

さて、私の理解によると、知識の技術学ということが可能であるのは、知識（はいしは、精神的な活動の成果）が物的な存在形態をとるためである。知的生産の材料となる資料や文献、アイデアを書きとめたノートやカード、……、こうしたものはみな物的存在だから、それを整理（物理的に配列）するについてもよい工夫の余地があり、効果も大きい。知識それ自体の存在性格はかならずしも物的なものであると言えないが、それを表現したものは大体において、文字が図象である。知的な生産活動が、文字や図象のような物的形象のなかで表現をもつこと、そしてとりわけ、知的な生産のプロセスが、文字や図象を物

的に処理するプロセスと照応すると考えることが、知識の技術学にとっては根本的である。そうした照応関係があればこそ、知的な生産活動（の一部）を、文字や図象を物的に処理するプロセスでも、代行するということが、可能となるのだから。

- 5 N.B. この理屈は、物的処理をさらに電気的な処理に変換して、コンピュータを用いたり、データ通信によって展開したりしたとしても、同じである。

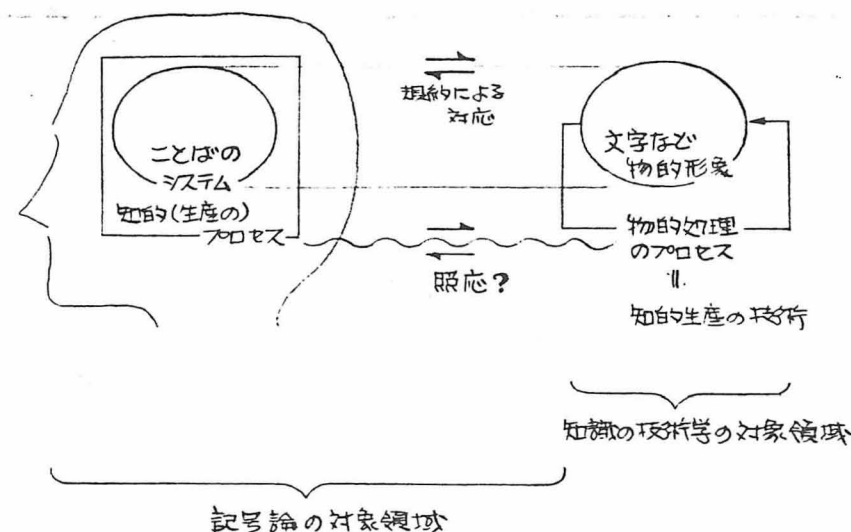
こうしてみると、知的生産の技術のうちもっとも革命的で空前絶後の発明は、文字の考案であったことがわかる。

- 10 文字の本性というのは、規約であって、一種の社会規範である。この規約は、文字とは無関係にあらかじめ存在している（音声的な）ことばのシステムから、適当な構成要素をとりだし、そのおのおのを、一定の図象のセット（アルファベットなり漢字なり）と（一義的・恒常的に）対応させるものである。こうして文字は、ことばとしてあらわれるものによって物的形象を与えることができる。文字を使えば、ことばとして表現されるかぎりの知的な活動を、いつでも物的な形態にうつしかえることができる。これは驚くべきことだ。

- 15 だが文字は、すでにことばのシステムが存在しているときにだけ、役に立つ。無ければなしでもすむものである。人間の知的活動のかなりの、いやほとんどの部分が、ことばのシステムとともに成立している。もしもそうだとすれば、すなわち、'知的生産'の秘密がことばのシステムのなかに隠されているのだとすれば、知識の技術学は、そのうち果たしてこれだけを、文字をはじめとする知識の物的形象の側にうつしとることができるのか？ もしかしたら、知識の技術学が想定するような照応関係は不完全であって、物的な処理によって知的な生産をたいて促進することにはならないのではないか？

- 25 ところがこれに対して、記号論は、文字などの物的な形象にうつしとられる以前の、ことばのシステムの存在規制それ自体を問題とする。ことば（音声言語）は、なにかそれ以前にことばの裏付けとなる実体があって、それをつしとるような、二次的なものではない。ことばと喋るという出来事がまさに、当の知的生産のプロセスである。

だから記号論は、その起源において、言語学と深い結びつきを保っていた。



それは言語学がことばのシステムを分析の対象とするからである。しかし言語学は、言語でないものを対象にしないという制約をもっているし、それに、言語のもつ秩序のうちとくに文法を重視していく傾向がある。これに対して記号論は、とくに言語にこだわらず人間のいとなむ文化的な活動全般に関心をなすげ、とくにその意味をあきらかにしようとする。

記号論をひと口で規定しようとするれば、意味の科学であると言うべきかもしれない。

意味という現象が、人間にとってきわめて大切なことは言うまでもない。しかし、意味現象を組織的に研究する方法は、記号論以前にはまったくと言っていいほど発達していなかった。記号論は、人間のいとなむ文化的な活動の各領域に、その意味を解明する技法とその方法論とを樹立することを目的としている。これは、人間の（集合的な）精神活動のなりたちそれ自体を究明するに等しい。このいみで、記号論は知識の本質学だと言えよう。

- N.B. 記号論は、精神活動（知的生産のプロセス）をそれ自体として扱わないで、記号を手掛りとする。記号は、何かの代わりになるものである。そのいみでは文字や図象などの物的形象も記号としての働きを持つ。記号論はこうした対象をたしかに取りあつかうが、その関心は知識の技術学の場合とはちがっていて、あくまでも精神活動（知的プロセス）の表現である限りにおいて考察するのである。分析の関心はつねに、そうした物的形象を操る精神活動（知的プロセス）に向けられている。

2 記号論の方法

記号論 (semiology) と言語学 (linguistics) とはその出発点において、切りはなせないところがあった。

今世紀の初め、いち早く「記号論」を唱えたのは、スイスのソスュール (F. de Saussure) という言語学者である。彼の仕事はすでに広く紹介されているので、記号論の理解に必要な事柄だけを、確認しておこう。

ソスュールは、日本語、英語といった言語が、どういう水準で存在しているといえるのかを明らかにした。ちょっと考えると、日本語にしろ英語にしろ、物理音から出来ているとみれば十分なように思われやすい。しかしソスュールやその後継者らが明らかにしたのは、言語を分析していったついに物理的な音声に還元してしまうことはできない、という事実である。(たしかに物質なしにはことばも存在できないが、それはことばが物質的な存在であることをいみくはない。) たとえば日本語の母音「あ」は、「い」や「う」や「え」や「お」でないという消極的なやり方でしか規定できない。これは音の水準であるが、これらの結合である単語、たとえば「いぬ」も、「ねこ」や「おおかみ」や……でない、としか規定できないのは同じである。どんな言語にも基本になるいくつかの音 (音素 phonème) や、その結合である有意味な最小単位 (形態素 morphème) が定まっているが、そういうものの組み合わせ——これを項 (terme) という——は、互いに他のものでないという差異によってのみ際立つ、対立のシステム (le système des oppositions) とともに存在している。

われわれが前節でみたことばのシステムは、ソスュールの観点からすると、対立のシステムとして存在している、ということができる。

さてここで重大なのは、この対立は文化的なもので、社会制度の一種であって、いってみれば人間が自然のなかに勝手に持ちこんだものだと考えられることである。この考え方は、ソスュールの恣意性の原理として知られる。彼の用語で、言語や記号は「恣意的 (arbitraire)」なものだが、これは、文化的・制度的ということとほぼ同じと理解してよい。自然的・物理的な存在に拘束されないという点で恣意的、日本語や英語がもちこむ対立が互いにまちまちだという点

で恣意的、なのである。言語や記号が恣意的であるとはすなわち、人間の知的活動やそれがうみだす意味世界 (知識)

が、物質的世界の秩序とは異なる秩序に属するものであることにほかならない。

こうして恣意性の原理が確定するのは、自然/文化の切断である。自然的秩序

をなりたせるものが法則だとすると、言語や記号をなりたせるのは規則だと言えよう。

言語・記号 (文化的秩序)

物質的世界 (自然的秩序)

図3

N.B. 記号は、それが指し示すことにある対象と、とくに関連がない。しかしなかには、どうも言えない場合、つまり指示するものとされるものが自然的なつながりをもっと見える場合がある。これは恣意性とは反対の現象であって、有縁的だと言われる。ソスュールは慎重にも、有縁的なケースを記号とはよばなかった。黒雲が迫りくる嵐を告げるようなまったく有縁的な場合、ドクロのしるしが毒薬であることを示すような多少は有縁的な場合を、それぞれ、指標 (indice), シンボル (symbole) とよんでいる。記号 (signe) とは、それらとは区別される、まったく恣意的なものだ。しかも、記号は、指標やシンボルが到達したものでなく、もっとも基本的なもの、人間の知的活動を本来的に特徴づけるものなのである。

個々の記号は意味作用 (signification) を担うが、そのはたらきはそれら記号がおかれる対立のシステムのなかで獲得されるものである。記号は意味するもの (signifiant: SA) と意味されるもの (signifié: SE) との結合である。意味するものや意味されるものは、記号が成立する以前に存在できるわけではなく、対立のシステムと同時に与えられる。それらはいずれも実物的なものではなくて、一方の SA は聴覚映像、もう一方の SE は概念、つまりどちらも精神内容であるといえる。

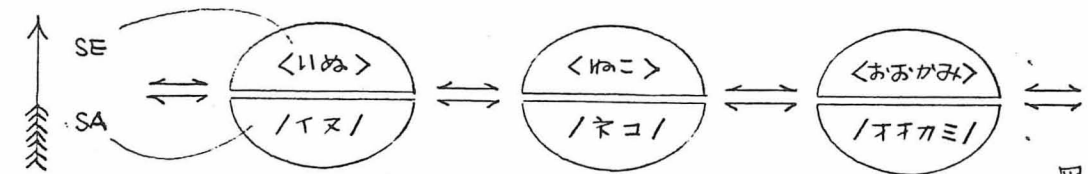


図4

このようにみてくると、意味の世界の存立メカニズムをソスュールがどのよ

うに考えたのか、すっかり明らかになる。彼は、意味現象の基本は分類ないしは分節にあると考えた。人間が、漠然たる精神内容を、これまた漠然たる音のイメージを手がかりにして分節し、そこに対立を設定したとき、そこに記号も、また意味も、発生するのである。(もちろんこれは各人が勝手に実行できることではない。人々が集合的に、前意識的に、おこなうことである。)

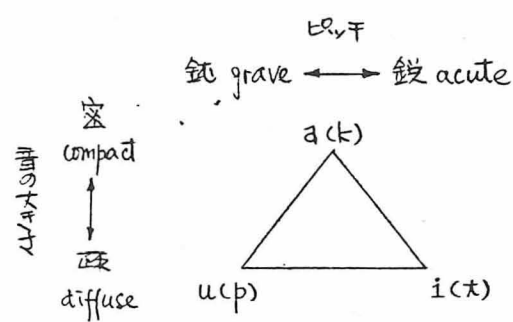
このような記号観は、厳密にはソスユールの創見にもとづくものである。そして今日の記号論者にも、この前提にたつ人が多い。

*

記号がこのように存在しているのだとすると、記号現象を解明するにはそれに対立のシステムとしてとらえなければならない線もいったことになる。

- 10 音韻論の分野では、ソスユールのあとをうけたトルバツコイ(N. S. Troubetzkoy)やヤーコブソン(R. Jakobson)が、音素の対立のシステムを分析する手法を発展させた。それは、2項対立(binary opposition)を活用するものである。一見どんなに複雑に見える対立のシステムであるうと、その下に潜むごく少数の2項対立の複合したものとみなすことができる、という。この手法が
- 15 成功したことは大変強い印象を与え、記号論的な着眼をとる多くの研究者、たとえばレヴィ=ストロース(後述)の手法に影響をおよぼした。

ヤーコブソンの母音-子音三角形



レヴィ=ストロースの料理の三角形

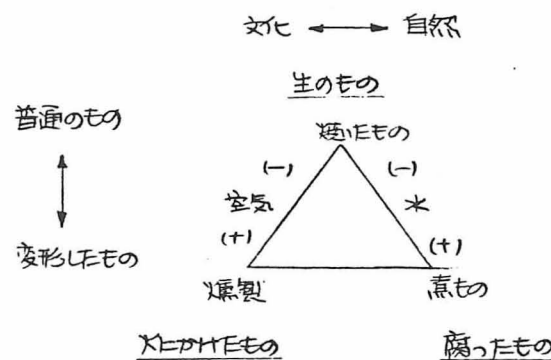


図5

2項対立や三角形をもちだすかどうかは、あまり大したことでない。重要なのは、記号を成立させる独自のメカニズムをみとめ、それを解明するにほかなら

ない分析の手法を手に入れる、ということだ。これが言えないと、記号論は成立しないことになる。

わたしの考えでは、ソスユール的な記号観の特徴は、実体的な世界観を覆えてしまったところにある。彼以前の考え方では、まず事物が、客観的・積極的に存在するのだということになっていった。机や太陽はたしかにそこに、言う

5 なければドーンと、存在し、世界をかたちづくっているのである。(世界を懐疑的にとらえる不可知論というものもあったが、これは対象の認識可能性を疑っているだけで、存在に対する信頼がひねくれて表現されたものとみることがで

10 きる。) しかしソスユールによると、机や太陽は、人々がそれについて喋ったり考えたり……、つまり記号的な世界を展開したりする以前においては、現に

15 われわれのしるようなものですらなく、ただもやもやとしたつかみどころのないものなのだ。人は記号を行使することとともに、こうした得体のしれぬ世界に分節をもちこみ、秩序あるものになっているのである。人間の用いる言語や記号は、世界の構築に参画しているのだ。

N.B. 今日の記号論をかたちづくる諸潮流がすべて、ここにのべたように反実体的

20 というわけではない。たとえば遺伝情報と構成する蛋白質の配列に、記号のことも歴史的なかたちを見出そうという試みもある。また、パーズ(C. Pierce)の展開した記号論とその系統は、ソスユールのものとは相当に異なった構想によっている。これらは現在わが国では主流でないが、無視してよいというわけではない。

こう考えると、ソスユールの記号観は、啓蒙主義の世界観や古典的な自然科学

25 の図式のなかには収まりまならないことがわかる。啓蒙主義や自然科学は、(実体的な)世界——(それをうつしとる)知識、という単純な構図をもつ。それに比してソスユールの記号観では、世界は、実体的な部分(自然)と形式的な部分(記号)との対峙からなるのであり、そのそれぞれに関してバツバツの等間が必要であることとなるう。

(実体的な)世界 — 知識

古典的な記号観

世界 { 自然 — 自然科学
記号 — 記号論

ソスユールの記号観

図6

記号論を自然科学と対照して性格づけると、こうなるだろう。自然科学は、仮説演繹系であるような理論を用意して、それを一定の検証手続きによって、データとつぎ合わせる。データを支配する秩序（自然法則）と理論とは、無関係である。記号論の場合、データに相当するのは、ひとびとが現に営んでいる記号的秩序である。ひとはこれを日々生きているのだから、その秩序を使いなし、⁵「知って」いるはずだ。ただしその秩序は、意識されないままに隠れている。しかもこれを、なにか自然的な実体を説明変数とする因果モデルによって説明することはできない（⁶恣意性の原理）。記号論の使命は、この隠れた記号的秩序を明るみに出す見解的な手続きを提供し、実行することである。この作業は（説明ではなく）¹⁰解釈とよばれる。そして、記号論の提供する見解的な手続きは（たとえば隠れた対立の軸を発見していく、というような）形式的なものであると見なければならぬ。こうして発見されるのが、たとえば「構造」である。

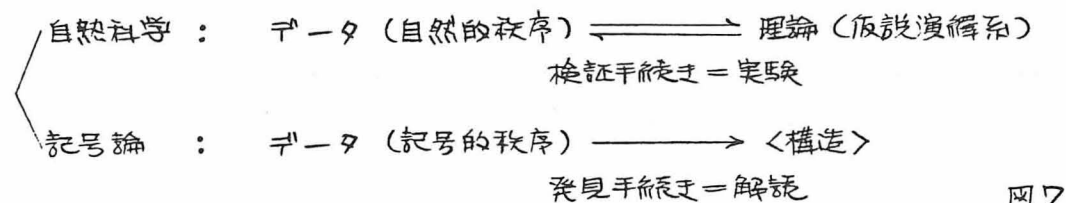


図7

記号論がこのようなものであるとすると、それは通常の（自然）科学とは一応別箇のものということになる。両者が互いにどのような関係にあるのか、互いに調和し統合へむかうべきものなのかどうかは、これから議論すべき問題である。¹⁵

N.B. このように記号論を理解すると明らかにその最大の問題点は、解釈の正しさを根拠づける方法がないことである。解釈の「出来栄」²⁰といった審美的基準によるしかないのが現状である。これは、自然科学の実証性と、対照的である。

3. 構造主義と記号論

構造主義と記号論とが深い内在的つながりをもつことは確かだと思うが、記

号論と同様に構造主義もなかみをはっきり図みにくい。両者の関係を見易く論じるのは簡単でない。

構造主義が解りにくいとされるのは、<構造>とは何なのかをはっきりさせるに⁵くいからである。しかし私は、これを代数学的な概念と考えると、すんなりした理解がえられるように思う。しかも記号論との関係も、かなり明確になる。そこでこの角度から、レヴィ＝ストロース（C. Lévi-Strauss）の唱えた構造主義をとらえ直してみよう。

N.B. 構造主義（structuralisme）はフランスあたりを中心にした現代思潮のひとつである。わが国には、記号論よりも先に構造主義が、（いやむしろ、記号論としてよりも構造主義として）紹介された。フランスで構造主義が脚光をあい、¹⁰大きな地歩を占めるにいたったのは、1950年代の後半であるが、わが国では10年遅れて、1960年代の末に、さわめて変則的なかたちで輸入された。

フランス構造主義の四天王という、レヴィ＝ストロース、フーコー（M. Foucault）、ラカン（J. Lacan）、バルト（R. Barthes）の4人ということになっているが、アルチュセール（L. Althusser）も多少の絡みがあるうし、最近ではラカンの弟子のクリステヴァ（J. Kristeva）やもっと若い世代ものも出てくる。まさに多士済々だが、なかでも言語学と強い結びつきをもち、¹⁵方法論的に言ってもいちばんしっかりしているレヴィ＝ストロースにまずとりつくのがよいだろう。

構造主義の謎をとくため、レヴィ＝ストロースの知的出自がしばしば関心の的となる。彼はたしかに、ソスニールと彼の系譜をひく言語学から、決定的なものを受けとった。恣意性の原理はレヴィ＝ストロースに継受され、自然／文化の基本的な対立として公理の如き位置を占めている。しかし構造主義の枠組みを築くにはもうひとつ、代数学的な<構造>の概念が必要である。

N.B. レヴィ＝ストロースは人類学が専門で、親族の研究であるとか、いわゆる未開社会の人々の思考法を分析する作業であるとかの方面で、すぐれた業績をあげている。彼は、たまたまアメリカで命中、ロシア・フォルマリズムの流れをくむ言語学首マヤコフソンと知りあい、意気投合して、²⁵「構造主義」に開眼したことになる。ソスニール再評価に、この面名のほした役割も無視できない。

現代数学は、射影幾何学の発展をひとつのバネにして、その基礎を固めた。

射影幾何学は、ユークリッド幾何学が区別していた対象（たとえば、長方形、台形、平行四辺形、……）をある観点から同一視してしまう。なぜなら、それらは視点のおきかたによって変化する。同一のものの異なったあらわれにすぎないから。こうした視点の移動（線型変換）にかかわらない、不変の性質だけが、射影幾何学の対象（数学的構造）である。

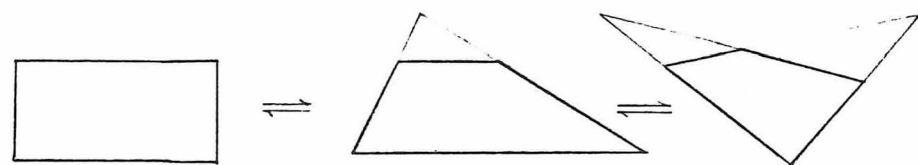


図8

数学的構造の概念は、何か特定の^{トポロジカル}変換 (transformation) の概念と裏腹になっている。たとえば、関数の連続性 (continuity) は、位相的な変換に関して不変な性質である。こうした性質を集めて、位相構造と称する。またたとえば、代数的な構造は、要素の置換に関して不変である。

10 このように理解すると、構造/変換の概念は、数学に限らずもっと一般に、あるタイプの現象の有用なモデルを与えるものであることがわかる。すなわち、なにか基底的な要因があってもそれだけでは現象が100%規定されず、そこに^{ヴァリエーション}攪乱要因が加わって一連の変異をうんでしまうような場合である。現象の見かけにまどわされずそこから基底的な要因——これをとくに、〈構造〉と表記しよう——をとりだすには、一連の現象のあいだに相互変換関係を想定してそれらを変換群としてモデル化し、攪乱要因を分離してしまえばよい。こういう自覚的な手法が、構造主義だと考えて間違いないと思う。レヴィ＝ストロースが専門にしていた人類学の、比較文化的な視点は、こうしたモデル化にまさにぴったりくるものであるし、文化・芸術領域で、個々の作品や伝承を隠れた全体的

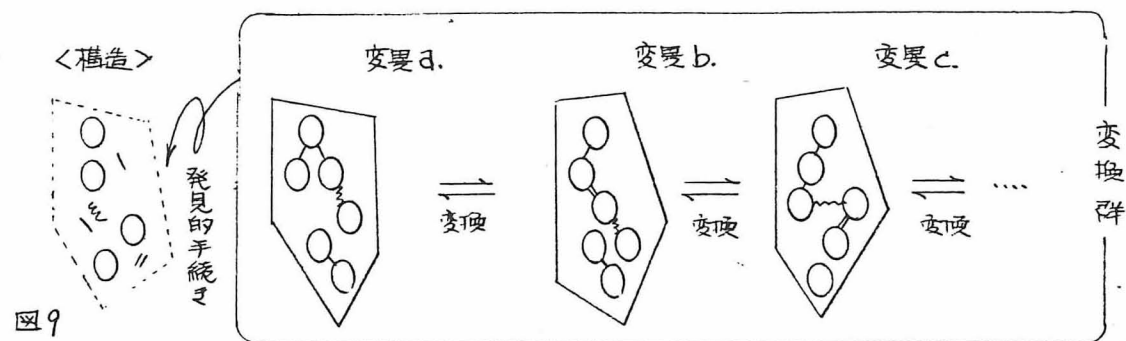


図9

な主題や傾向の^{ヴァリエーション}異本だとみなす比較研究の視点にとっても、この方法はきわめて有望であるとみこまれる。

図9に示したのは、以上のロジックを要約した構造主義の基本モデルとも言うべきものである。構造主義的な試みの成否は、発見的手続きを特定できるかどうかにかかっているが、これはまさに、個々の変異がどのような要素の組合^{ヴァリエーション}わせであって相互にどのような変換によって結びれているのかを特定すること、すなわち、変換群を特定することと等しい。レヴィ＝ストロースの実行した作業もまさにこれである。

N.B. レヴィ＝ストロースが実際に手がけたのは、親族研究と神話研究の2つである。

親族研究では彼は、'親族の基本原則'を彫出し、父方交マイトコ/母方交マイトコなどの対立をとりだし、それらによってさまざまな社会の親族システム^{ヴァリエーション}を変異として記述し、父方交マイトコ偏を規範化する親族システムが存在しないことを根拠づけ、最終的にはそれら親族システムの隠された主題が「女性の交換」にあることを結論した（『親族の基本構造』）。同様に神話研究においても、彼は、問題となる一連の神話を「神話素」に噛みくだき、神話に埋めこまれたさまざまな分類上の対立をとりだし、それらによってさまざまな神話の、^{ヴァリエーション}変異としての相互的な位置関係を特定し、最終的にはそれら変異のあいだの変換に関して不変な〈構造〉の存在をさししめすのである。（神話の〈構造〉とは、さまざまな^{ヴァリエーション}変異を通じて主題的に自らを繰りひるがる、「野生の思考」の集合的な理性の他在である。）

ここで構造主義の基本モデルとソシュールの記号観（恣意性の原理）との関係を考えてみよう。この両者は、密接な関係がある。すなわち、親族にせよ、神話にせよ、人間のいとなむ社会活動の領域が、自然的な秩序とは切りはなされているからこそ、そこには一連の文化的な変異の生れる余地が生ずるのだ。文化とは、多かれ少なかれこのような変異の集合態である。

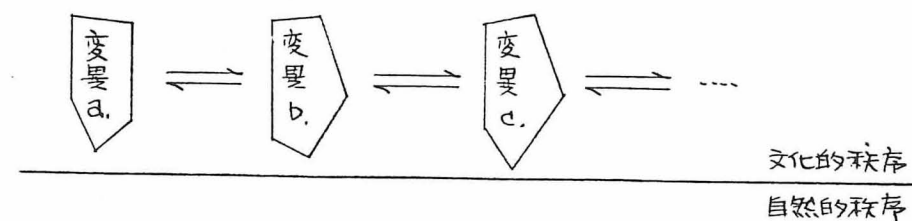


図10

N.B. レヴィ＝ストロースが彼の親族研究で強調した、近親縁組は、自然／文化の接点に位置し、恣意性の原理にもとづいて親族領域と文化の間に区画する境界意識たるものであった。こうして発見した女性の交際の＜構造＞に自ら制約され、レヴィ＝ストロースは一時期、社会を女性・財・言語をめぐる3重の交^{フーズ}流のシステムとみなす、'コミュニケーションの一般理論'を構想する。これは5 実体的な議論であり、社会理論のひとつの可能なタイプだろう。だが彼はのちに、こうしたレヴェルの現象では十分に＜構造＞が浮きぼりにならないと反省し、研究をさらに抽象的なレヴェル、つまり純粋に思考の形象である神話にすめるのである。神話研究は、図9ないし図10に表わすような構造主義のロ^{ック}ックを、もっとも完全に体现するものだと言ふよう。

つぎにひとつひとつの変異に目をむけるなら、それはちょうどソシュールの発見した対立のシステムそのものである。すくなくともレヴィ＝ストロースの議論においてはそのようだ。だから、記号論の内幕である解釈の作業——記号のシステムをなりたてる秩序を発見する手続き——は、構造主義のタームに15 置きなみると、個々の変異を対立のシステムへと分解し、それら相互の変換関係を発見して＜構造＞を抽出すること、ということになる。

かくして、なにごとかを解釈せんとする記号論者は、その対象とあるものの^{ヴァリエーション}変異と想定する限りにおいて、同時に幾分かは、そこに隠された＜構造＞を見出さんとする構造主義者としても振舞わなくてはならない。

20 N.B. 変換といひ、隠された＜構造＞という、ひとは、表層構造と深層構造を断て両方を変形規則によってつなぐ、変形文法という重要な言語理論のことをついで連想してしまうかもしれない。しかしチョムスキー(N. Chomsky)の変形文法とレヴィ＝ストロースの構造主義とのあいだには、なんのつながりもなく、一応は別々のものである。(もっとも隠れた関係があるのかもしれない。気が25 かれたむきはご教示ねがいたい。)

4. 記号論への批判

記号論と構造主義とが複合した上述の解釈手法は、実用上、さまざまな文化

現象の分析にしばしば相当な威力を発揮する。かくして記号論はいまや、意味の科学を担うものとして、その地歩を固めつつあるかにみえる。しかしまた、記号論に関して未解決の困難や問題点もまた多いと言わなければならない。そのうちのいくつかを検討する。

第1に、記号論ないし構造主義に対して寄せられる、外在的な批判。

これは最も古くからあるタイプのもので、マルクス主義の範式に従わないブルジョアイデオロギーであるとか、人間の自由意思をみとめない反人間主義であるとか決めつける非難をいう。マルクス主義との関係は重要なので、少しだけ述べてみよう。

マルクス主義の教義からすると、記号現象を含めて人間の知的(生産の)プロセスやその所産たる知識(上部構造)は、のこらず、社会のより基底にある実体的な過程(下部構造)に規定される。(このいみで、マルクス主義は、とくに記号論など必要としない。) これに対して記号論は、そのような規定関係を否認せず、むしろ逆にそれが存在するはずのないことを主張する(恣意性の原理)。マルクス主義が知識や芸術を考察する場合、絶対に政治主義的になる15 し、その解釈も内容主義的、実体還元的なものとなる。記号論の解釈はこれとちがって、個々の作品の表層にとらわれない形式主義的なものだ。

N.B. 他の外在的な批判と同様、マルクス主義の言いがかりも正面から検討する必要はないのかもしれない。しかし私の見解では、人間の知的活動の理解に関して、マルクス主義が記号論に力打ちできないことは殆ど歴然としていいると思う。マルクス主義の範式が完結したものであるためには、下部構造を構成する諸カテゴリー(たとえば、労働とか、商品とか、……)が上部構造に依存しないて定義できなければならないが、それは成功していないし、今後成功するみこみもないからである。これはマルクス主義の実体的な世界観が、言語・記号を適切に考察できなかったことと結びついている。25

わが国の記号論が、マルクス主義と対決しながら成長したというよりも、マルクス主義の教義が色褪せて退潮していった空白を埋めるように、彌漫してまたとしか言えないのは残念である。

第2に、記号論の論理に内在的な、方法論的な批判。

記号現象は、人間の多様な活動分野にまたがる基本的な現象である。そこで当然にも、記号論の前には多彩な応用可能性がひらかれていいることになる。二

うして拡大適用 (extrapolation) —— 言語学の技法を言語現象以外に適用したり
 すること —— が一般的な傾向となる。ところが、拡大適用の正当性を保証する
 ものはもともとない。強いて言えば、解釈が現に上首尾にすすんでいる
 (と当の記号論者や読者が信ずる) こと位であるが、これにしては、実証科学
 の客観的な検証手続きにくらべると、はなはだ心もとないものである。レヴィ
 =ストロースの神話学にしても、このような拡大適用の一例であるうか、とき
 に鍔金術的と評されるばかりの名人芸であって、同じデータを用いても彼以外
 の人間が彼と同じ結論をうるであろうとは信じにくい。こうして反証可能性に
 乏しいので、厳密に考えてゆくと、記号論ないし構造主義の作業をささえる方
 法論的な根拠はなお薄弱なのが現状である。

つきつめて考えると、拡大適用どころか記号論とい自身^{自身}の正当性も危うくな
 ってくる。こうした点については、論すべき多くの点があるが、今回は深入り
 を怠けた。

N.B. 宣伝をかねて一例をのべておくと、『セクシ・ギャルの大研究』(上野千鶴子、
 15 光文社) という面白い本がある。これは、最近のなまな映像にあらわれた女性像の
 総体^{エンソロジー}をある数例として読み解こうという試みだが、ここで採用されている動物^{動物}
 学^学——これはいっまとした自然科学——の拡大適用の正当性は、どのように保
 証されるのか? (一見解釈はうまく行っているようだが、もしかすると、エソ
 ロギーの拡大適用というアイデアがなまなと記号論者とをともに押えていると
 20 いう仕掛けなのかもしれない。) また、エソロジー起源の記号論とソシュールの
 記号観とは水と油のようなものだが、これはどう調停されているのか? こうし
 た疑問をもって読むと2度面白い。

第3に、記号論の限界に関連する批判。いつはこの点を私は強調しておきた
 11。

わが国の昨今の記号論流行りが、股イデオロギー現象と並行するものである
 ことをのべた。記号論は、高度消費社会の「解説」ゲームとして、それ自体はや
 消費の対象であり、カタロク文化やカルチャー指向のなかでもはやされている。
 実物のなまなましに手をふれない、安全なゲーム。

こうした事態の要因は、ソシュールの記号観のうちにも求められる。彼は実
 20 体と形式とをまったく切りはなした上で、純粋に形式的な記号の概念をたてた。

このような分離は彼の時代には、もっとも過激で革命的な作業だったのである。
 しかし、たんなるこのような分離が完了し、記号が世界の構成素であることが根
 拠づけられたなら、次になすべきは、世界のなかで記号と記号以前の实体と
 がいかにせめぎあっているかを考えることである。そうしたせめぎあいの場
 が、ひとの身体であり、また行為である。ここに現われるようになるのは、権
 5 カである。

アコーの知の考古学は、権カ
 と身体^{身体}の地質学的堆積に測深しよ
 うとする意欲的な仕事である。



しかしわが国の記号論は権カの特

ーマを迂回し、世界観になりあがろうとした。これがコスモロジーであり、中
 心ノ風縁のロジックである。

記号現象はたしかに広汎な現象であるが、それが権カと連動するとき、たと
 えば貨幣として、また法として人々をとらえるときに、経済や法・政治といっ
 た、現代のもっとも中心で散らばっている領域が生まれている。もとよりこうした実
 15 体的な世界は、言語学の定礎を去したソシュールの関知するところではなかつ
 たかもしれない。しかし、マルクス主義は少なくともこうした領域に向いていたの
 であり、安直な記号論をこうした関心にとってかえることができるわけではな
 い。

わが国は伝統的に、規準となるべき厳格な知の体系——神学——を欠いてき
 20 た。そのかわりに非論理的な神話思考が権をまかせてきた。いま盛行している記
 号論とコスモロジーは、こうしたありまな神話思考がようやくその学問的な
 意匠をみつけたところ、というおもひがある。そこで私は、アンチ・コスモ
 ロギーを標榜する。求められているのは、法・政治および経済の記号論であり、
 記号と権カの連動に関する新しい学説である。資本制に関する完全な解説にお
 25 いて、マルクス主義を援用することである。